

令和7年度 【総合学力調査の分析】

国語

教科の平均正答率、達成率ともに全国の数値に対してはほぼ同じ数値で、日野市数値を下回りました。観点別にみると「知識・技能」の、領域別にみると「言葉・情報・言語文化」の正答・達成率の数値が、日野市の数値よりも3ポイントほど低い結果となりました。例えば、「漢字の書き」に関しては、日野市の平均が「60.1」であるのに対し、本校は「57.2」でした。このように、応用より基礎、思考・判断・表現よりも知識・技能に課題がある傾向が明らかになりました。そのため、例えば、毎時間の小テストなどの地道な取り組みを習慣にしていくことや、語彙を増やす学習活動、情報の適切な取り扱い方など、基礎力の育成を図っていく必要があります。

上記に付随して、意識質問に関して、「本や新聞を読んでいる。」という項目において、特にA層とD層との差が広い結果でした。学習に対しては真面目に取り組もうとする態度が見られますが、学習の土台となる知識や技能は、普段の生活における読書習慣から形成される力が必要になる場合が少なくありません。学校や家庭において、日常的な読書習慣を身に付けさせる工夫や働きかけをしていくことが重要だと考えています。

数学

教科の平均正答率、達成率ともに全国および日野市を下回りました。具体的にみると平均正答率で、全国とは 2.0 ポイント、日野市とは 0.9 ポイント下回っています。達成率は全国とは 8.3 ポイント、日野市とは 5.8 ポイントと下回っています。また、「分数」の内容において顕著であるといえるのは A 層と D 層との差「A-D 層の差」が 4 設問で 55 ポイントを超える結果を得ました。また、面積・体積の計算の分野でも多くの項目で 55 ポイントを超えました。ここから、基本的な計算過程が見についていないと計算が困難になる分野での生徒間での差が広いことがわかりました。生徒の習熟度に合わせた指導方法を工夫しながら、生徒一人一人の苦手分野の克服に向けて、個別の指導にも力を入れていきます。

教科の理解度という項目においても A 層と D 層との差が広い結果でした。基本的な計算過程が見についている生徒と、そうではない生徒との差を埋めるような授業展開を目指していくことが必要であると考えられます。また「教科の好き嫌い」の項目でも他教科と比較すると A 層と D 層との差が広い結果でした。具体的には 72 ポイントの差があった。ここから、嫌いににならないよう、生徒の興味関心が損なわれないような工夫を授業内に入れていく必要があると考えられます。答え合わせで終わらずに、どのような考え方や解き方があるのか。アンケート結果が何を意味しているのかを様々な視点で考察するなど、多角的な視点の育成が必要と考えます。様々な問題やグループでの取り組みを通して、多くの考えや意見に触れることを通して、より深く考えることができる授業の工夫を重ねていきます。

英語

全国および日野市と比べ、正答率では大きな差はみられなかった。全国の平均と比較すると、教科総合で+1.3 ポイント、基礎+0.9 ポイント、応用+2.3 ポイントと学年全体で全国平均以上のポイントとなっていることが分かる。一方、基礎の部分では A-D 層の差が 67.4 ポイントあり、塾での取り組みや小学校での学習内容の差が結果として二分化傾向を強めている可能性がある。少人数によるグループワークを通して互いに学び合える学習の充実や ALT を活用した実践的な授業、ICT 機器の使用や教材・教具を工夫し、苦手意識やつまづきに対応した授業を展開していきたい。

主体的に学習に取り組む態度の質問では、ほぼすべての質問に対する回答が全国および日野市と比べ大きな差は無かった。しかし、「日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、外国の文化に対する理解を深めようとしている。」という質問に対しては D 層の生徒からも肯定的な意見が多く、全国や日野市と比べると「肯-否の差」の部分で 2 倍近くのポイント差で肯定的な意見が多かった。日野市の平均と比べても差があり、中学校に入学して間もなくの時点でこのような結果が得られたことから、大坂上中校区の小学校では英語の授業で D 層の生徒でも理解できるような言語活動を行い、外国との生活や習慣、行事の違いについて興味を持たせていることがうかがえる。

また全国及び、日野市、本校で A-D 層の差が大きくあった項目が「関心のある事柄について、相手からの質問に対し、相手に伝わるよう英語で話すようにしている。」「趣味や好き嫌いなど、自分に関する基本的な情報を相手が読んでわかりやすいよう英語の文で書くようにしている。」であった。全国的に同様のことが言えるが、D 層の生徒が躓く心理的な要因に「相手にうまく伝わる話し方や書き方が分からない。」ということが考えられる。英語を話す際には相手の目を見て、はっきり、抑揚やアクセントを意識しながら相手に伝えることや英語を書く際にはアルファベットの高さや文字と文字の間隔などコミュニケーションを行う上で基本的な部分を指導し、伝わりやすさとは知識や技能だけで決まるのではないことを指導し結果の改善に努めたい。

理科

本校の平均正答率は、全国と比べて－3.7 ポイント、達成率においては、－7.1 ポイント下回りました。特に記述式問題の平均点が極めて低くなっています。知識を文章で説明したり、思考過程を記述したりする力が圧倒的に不足しています。また、「基礎」（65.9 点）に比べ「応用」（62.9 点）が低く、基礎知識を活用する力に課題があります。そして、分野により達成率に偏りがあり、「燃焼の仕組み」と「土地のつくりと変化」の平均点が著しく低く、特に苦手な単元であることが明らかになりました。

記述力・表現力の強化のためには、日々の授業で「なぜそうなるのか」を言葉で説明・記述させる機会を増やし、また、実験レポート指導を強化し、論理的思考と表現を促していきます。また、応用力を向上させるためにも知識を応用する演習問題を取り入れ、グループワーク、ディスカッションを通じて、多角的な視点から考える機会を増やしていき生徒同士が学び合っていけるような授業づくりをしていきます。苦手な分野においては、実験やモデル、視覚教材などを用いて理解を促したり、必要に応じて個別指導の時間を確保したりして分野による偏りをなくしていきたいです。

学力向上に関係の深い質問項目では、「新しく習ったことは、何度も繰り返して練習している」「テストで間違えた問題は、もう一度やり直している」などの項目で肯定群回答割合が全国に比べて大きく下回りました。これは、生徒が授業で得た知識や技能を定着させるための反復学習の不足、および誤答からの学び直しという学習サイクルが身についていないと考えられます。生徒が自らの学習状況を把握し、必要な復習や改善を行う「メタ認知能力」や「自己調整学習能力」を育てていけるよう、学習の前後で振り返る機会を設けていきます。